

此の入陽を何と見る  
ブレイリー ある草原  
情れなしとてみあぐる 胸を  
刺す光!!  
おゝ! その光りの紅さよ!!

### 兄等を送る

新谷 又平

あはれは桐の一葉に  
兄等が御身に散り初めて  
世は凋落の秋の日や  
世はとこしえの秋の日や  
西なる山に日は落ちて  
湖畔に浮ぶ月影に  
渚に寄する波の音に  
秋の哀ぞ勝りけむ

秋もやうやうふけ行けば  
野分の風の吹きすさび  
何時まで若き兄弟ぞや  
すべては夢となり果てぬ  
仰げば尊き師の君の  
教の學び途五星霜  
重ねて今や去り行かむ  
兄等が胸ぞ如何ばかり  
行方は煙雲の浪  
八重の潮路の果よりも  
變らぬ光永劫に  
忘れ給ふな學び舎を  
我等が湖畔の學び舎に  
君去りましし學び舎に  
集ふ我等弟等を  
忘れ給ふな心して

### 秋の實り

久木 信治郎

廣く廣く黄金を敷きつめた  
秋の實り!  
そよそよと風が吹く毎に  
黄金の波がゆらぐ  
頭を垂れた黄金の海に——  
かがし一人静かなさゝやきを聞く

騒ぎ立てて  
かけ廻つてゐる  
師走のあわただしさ  
來る年と  
逝く年と  
まあ……  
皮肉な對象だ

### おもひ出

杉山 十三雄

### 師走は語る

西村 英男

年末だから……  
何となく落ちつかない  
あれよ、これよと

まさごの岸に 寄す波が  
海のかげらの 貝殻を  
運びて來れば 人の子は  
波の退きたる 折を見て  
小さき片手を つと出だす  
暮れ行く夕陽の かげうけし

波のしぶきは  
流れ流れて  
見知らぬ人の  
息づく貝も

こがねいろ  
此の濱で  
手のひらに  
くれなゐに

夕べとなれば  
やさしい細き  
窓から寂しく  
のぞけば廣き  
友なし千鳥の

蒼白き  
月見えて  
人の世を  
海の面に  
かけ淡し

おもひ出の海  
やさしき姉と  
貝を拾ひし  
今は夢なり  
涙を誘ふ

あゝ瀬波  
むつまじく  
あの海も  
このわれの  
風の音――

### 霧

霧は、白い霧は、  
夜の町を流れて行つて、

消えさうに冷たく光る、  
街燈を袖で包んでやりました。

霧は、白い霧は  
ねむの木の下で眠つて、  
ばら色の夢を見た時、  
あけ方の月と  
ほゝろみあひました。

### 港

港に夜霧が降りました。  
遠い岬の燈臺の  
灯がぼんやりとぬれてます。  
うつすら夜霧がこめました。  
晝間入つた黒船の  
赤い灯もぬれてます。  
空には朧のお月様  
水夫がねるのか黒船の  
八時の鐘がなりました。

### 闇

閉ぢた暎の翳よりもなほ匂やかに揺れながら  
濃い闇が迫つて来る、挿へ所のない、それで  
ゐて紫の花蔭よりも濃く甘やかな匂がゆるく  
香華の様に立ち昇る。濃く、次第に濃く、今  
は息苦しい程になつた空氣の密集が、突然ゆ  
らゆらと亂れたかと思ふと、前よりも一層重  
い闇がおし寄せる。――鼠だつたのだ――  
どきつとした胸の高鳴りはまだ止まないのに、  
今の物音は本當に聞えた音かと疑はれる程、  
名残りもなく闇の中に吸ひ込まれてしまつて  
ゐる。

唯、有るものは闇、そしてこの小さいながら  
も規則正しい呼吸。生きてゐる、私は生きて  
ゐるのだ！、しつかりと兩手を組んで私は  
凝然と闇を見つめた。



### 夜



若林正三

夜風ひそやかにある芭蕉の葉  
何處かで虫の聲すもう夜も更けて  
もう雨あがるみづうみたかく見え  
青いトマト赤く熟れ赤い夕陽

### 栗

西村英男

小冠者や心躍らす栗林  
夕暮やくもの巢ひかる栗林  
いがぐりをそこゝに見る秋の道  
くりの實や拾ひ上げては又落し



短歌雜詠

藤田一一一

花柳の咲きそむる頃あひみんと別れて今は旅に日を経つ  
旅路こそ遙かなりけりこの國の果てしの家もありと思へば  
戀しきは過ぎし思ひ出わびしきは今住む旅の夕月の空  
色も香もうつろひ果てし草花の姿の如く旅に病むかな  
風の音に夜は明けたりと戸を開きをり立つ庭に雪ぞ降りける  
冬ざれの 大野の原に淡雪は曉早く降り積りけり  
楢の木の大木の下に吾れ立ちて木屑つめたく觸れにけるかも  
名にし負ふ石手河原に繁りたるこの松原に雪は降れるかも  
音するは河上の瀬か峯を渡る松風なるか夜半の淋しさ  
遠嶺なる石鎚山に積む雪は斑らく夕榮えにけり  
夕暮の冬のみ空に青いろの星の光りは清らなりけり

見ゆる限り冬枯れ眞芝枯れ木立果てなき園に雪は降れるかも  
眞青なる池の水面を水草は一莖風に流れ行きけり  
木がくれに眞白き鳥の來て鳴くはわびしき冬のおとづれにこそ  
老松の梢に居りて鳴く鳥は山ほととぎす空に鳴くなり  
野に出でて過ぎし日思ふ吾身には眞芝なれども草はなつかし  
朝雨に冷えびえとせる竹林の露にぬれたるつる草の花  
つる草の花の心は吾が心咲くべくもなく散るべくもなし  
雲間洩る夕べの陽さし明るくて木の下道に影斑らなり  
池の面を浅みへ寄り來る緋の鯉の姿大きく見えにけるかも  
乏しらに咲ける御寺の梅の花香も仄かなる雪となりけり  
風立ちてにはかに寒し瀬戸海の岬に遅く月出でにけり  
外面には風あるらしも夜の更けを竹の葉すれの音しきりなり  
庭にさす冷めたき影にをり立ちて心おのづとつつましきかも

地圖を染めなほす日

平井乙磨

短歌を行切にしたのは啄木の創意だ私が敢て啄木の亞流を掬むわけは  
それから來る効果的なものを想ふてゐるからに外ならない

遂に  
世界地圖を染めなほす日が来たか  
海のむかろを考へる

對日經濟封鎖！

瞬間 硬化した皆の顔が  
くづれて 嗤ひだす

ストーブは戦争話で燃える  
そこへ

また割りこんで来た 椅子がひとつ

落日を凝視める兵士 その

號外だけでも  
涙を催すではないか

砲身の角度から

弾道を描いて

亢奮をまぎらしてゐる 號外

戦闘寫真號外の大砲の煙が  
どんなに  
僕をあふりたてることか

窓にちる山茶花と楽しんでゐたとき  
不意に鳴りだした  
チチハル攻撃のラヂオ

日暮どき  
號外の鈴が聞えないと なんか  
もどかしくてならぬ此の頃

深夜の滿洲地圖から民族の意識が  
ああ  
そくそくと聞えるではないか

亡びるものの淋しさを背負つて  
逃げる支那兵に  
夕陽が赤い

故郷は遂に私のすべてであるか あの通ひなれた道や 流れや そしてまた  
道端の石や 私は夜 地図をひろげて 私の村をだきしめる (二首)

さら川のカーブを しつかり押へてゐて  
私の村が  
地図を染めてゐる！

指のしたにかくれた故郷の  
村から  
友の顔がほつりほつり浮ぶ夜だ

彬大な空をかぶつて屋上園ベンチに憩ふ  
空は  
ネクタイとおなじいろ

人ごみから春が流れて来る  
みんな  
あかるいネクタイをしてゐる

埠頭起重機の堵列

つめたい  
魚の眼をした海がゆれて 秋！

## 自 畫 像

名 畑 惣 次

靜に雨が降つて青葉がゆれて白い蛾の死んでゐる庭  
勞れて坐つた机の上にア、レターがあつて——白いバラの花  
緑の日傘を傾けて行く少女の足もとに咲いた晝顔の花緑堤！  
ヨットが矢の様に湖面を走つて——逆光線の午後三時半！  
車窓からハンカチだけがヒラ／＼見えて友の顔の見えない淋しさ！  
窓を開いたやには私の細胞にしがみついた朝の葉緑素！  
廣い河原にさびた罐が轉がつてゐて燕麥が風に揺れてゐる  
犬が泣いた赤い壁のそばの茨の花が白くちつてゐる初夏！  
猫が顔を洗つてゐる午後鶏舎の餓ゑた鶏の鳴く聲！  
だれか口笛を吹いて行くあの淡いコバルトの空をながめながら  
柳の影に子守歌が聞えて——私は私を忘れてゐた  
憂鬱な私は窓を開けたしめつた庭に猫と猫が笑ひ合つてゐた  
憂鬱にねころんだ部屋にしめつぽい風が流れて梅雨を告げにくる

三十分も休んだ私に先の聲が聞えて晝の山の静けさだ  
二階に私だけ居た時チャーミングな蛙のなく晩がまたとなくうれしい  
悦びで満ち満ちた私を蘇鐵の新芽がつき刺さうとする朝だ！  
ブリズムの様な朝靄に洋館がとり／＼の彩色をされてゐる  
謎の立つ池あり青い嵐が流れ込んで私は透明な朝心になる  
朝靄の田圃に立つた俺にいきなり大きな挨拶を投げていつた村娘！  
机上にペンを走らす俺にともすれば青葉の風が幻想を驅り立てようとする朝！  
子供がはしやいでいる朝俺はもぎたての南瓜を冷く抱きあげる  
サイクルレースのまねといふ隣のみつちやんの子供らしい朗らかな眼だ  
けろりと晴れた蒼空の下にどこまでもどこまでも白い道！  
葉緑素がけぶる朝土手を歩きながら俺は朗かにとても朗かに口笛を吹いたよ  
しつとりとしめつた並木の間から太陽が明るく大きく覗いた朝のよるこび！  
草原がすつかり刈りとられて飛び廻る蜂の淋しいうなり  
チンギースの聲に埋もれながら詩歌の第一頁を開いた時の嬉しさ！  
買ったばかりのモルモットが丸い目を感じ易く動かしてゐる朝！  
夜鴉がしきりとないて孤獨の俺に更に孤獨を食べさせやうとする秋の夜！  
十疊の間にたつた一人の俺の前にトランプのポイント一枚きりがぼつんとある  
別府灣を見ながらドライブする私に山鶯が朗かだつた  
自然を破壊する意志——阿蘇噴火口で地層誌をひろげて見た  
博多人形が微笑する夜旅からの便りを故郷へ書いてゐた

## 爽竹桃

牧野新太郎

小雀の一羽下り来てチ、となく爽竹桃の花さける庭  
池水に影をうつせるバラツルの何を思ふかものなやましく  
大鷲のかうみつたへるこの土塀すぎにし時を思出さしむ  
新鮮なミルクの様な感覺を一杯たゝへたこの村の朝  
青白くさびしく流す尺八の僧の着物は羊かん色だ  
彼岸が来て尼僧の生活意識が復活する！  
荒氣味の湖水をグイと帆をはらませて走るヨットだ  
飯の甘さとうれしさをごつたくさにしてジツクリ味つてゐる友のプロファイル  
小鮎がピチ／＼躍動するスバラシイ六月の視覚だ  
バラが眞赤に息づいてゐる朗らかな朝の氣層だ  
うつくつした感情をこの疊にじめつかせて灰色の雨は降る！



懐しのグランド

若林正三

なつかしき我がグランドよ濼ばたの

胡桃の下に暫し憩ふも

友だちと日毎日遊ぶグランドの

銀杏淋しく秋の風吹く

秋 四 題

木野戸勝逸

ほんのりと月光うつる我家の

近くを流る秋の川かな

ほのかにも月昇るらし花畑の

花のぬれ葉の揺れつ光りつ

熟れやらぬ青きリンゴの味に似し

心に哀れ秋の夜の風

夜のそこにしみいる如くこぼるぎの

聲ほそぼそとかすかに聞ゆ

海 原

竹内

詩は常に新なるべきもの、古典、定型律より一步も出得ない歌は畢竟ほろびゆく玩具に過ぎない。――

我が父の主張容れられず退職になるときまりて心落しぬ

X

やたらに引いたアンダーラインが不規則に頭を乱して来る  
海原にだだつびろい憂鬱があるその上に浮いてゐる白い船  
検温器に見入つてゐる母の腫に自分の体温を豫想する  
俺も煙になつて蒼空に昇りたいあの高い高い煙突の口から  
噴火しない火山が取り残された淋しさにもがいてゐる！  
その汽車の窓から入る匂ひが近づく故郷を否定させるのだ

凍つた海の底に靜かに靜かに横たはつてゐた自分を見出でる  
産業合理化ポスターの前に産業合理化された男が一人寂しく  
小さい食膳の前に坐りながら子供扱ひにされてゐる自分を感じてゐる  
父が喜んでゐることだけで嬉しいカナリヤの聲の朗らかな朝  
僕に残された父父に残されたたつた一人の僕である  
複雑な學科を習ひながら複雑な自己心理を解剖して行く  
今日も仕事のない叔父がボカンと來て泊つてゐる淋しさ  
湖が今日も荒れてゐるのに私の心を通り過ぎる巨船  
今日も凍つた海を碎氷船が幾艘も通つた光つて  
今日は土曜だと思ふ心が久振りに窓外の景色を楽しませる  
木材を一杯積んだ貨車がのろ／＼走つてゐる單線！  
顯微鏡下の下等動物に何となく親しみの持てる午後の明るさ  
顯微鏡下の竹筒のやうなヒドラを下等動物と輕蔑しながらも  
噴火しない火山口を散歩してゐると春は楽しいね  
春の退屈にこつそり手品の眞似をしてゐる明るい部屋  
外は暗い、月も星も八面体の結晶に見える空のおそろしさ  
また昔の夢を見たとき云ふ父の淋しさは慰めやうもない  
もう歸るのだ、街はもう上り煙突が倒れさうな夕暮の風景  
消せば消される黒板の文字、はかなみながら濃く書いて行くのだ  
磨かれた墓石刻まれた友の名だがやつぱり石ころだと云ふ感じ

満ち足りない心に憂鬱な遠い遠い海洋の日没  
ぬつくと立つ山車倉の影からぐつと來る故郷の匂ひだ

定期汽船が港の外を素通りして行く淋しさ、棧橋の波は高い  
感光性の足りない乾板に——話しかける根氣を失つてしまつた  
着物を一枚仕上げた歡びが母に散歩をさせたが、るのだ  
漆は緑色の匂ひを發散して——泳ぐ小魚は僕と相似形だ  
料金未拂で斷線された夜、私は新刊書をもてあましてゐた  
吃水線は水の下にある甲板から、窓から流れ込む水の幻想！  
街を出るとすぐ水田だそこに工場街の立つと云ふ町の過渡期  
このろ汽車が私の降りる驛に着くまでに何か怖い事がおこりさうな、不安  
プラットに知つた人があつち向いて、汽車はなかなか來なかつた  
ポートをのり出して私は風邪を引いた——湖はいくらかすねてゐた  
先におきた父の齒みがき粉のこぼれを追つて素足で行く庭





## 紀行文

### 桑名への旅

新谷 又平

七月廿六日朝まだき村の社を後にす。

清爽の氣肌を襲ひ雞聲一聲村里いまだ目覺ず旅出の歡喜胸を打つ。

桑名に行かんとて道を大君畑に志すなり。

一行七名旅装輕々しく朝露に濡れつゝ進む、心地すがすがし、東雲の我等と共に輝やけるに又勇氣百倍なり。

多賀を過ぎ佐目に至る、此所にて暫し憩ふに村童の言ふまゝに佐目洞窟を探らんとす。村より一町餘にして佐目洞に至る洞中をきはむるに泥水ありて衣を汚せし者二三。此所を出でて大君畑に向ふ。村に近き頃より雨降り初む。噫慘なる哉

なり。

登りにも勝りて草茂くテントを冠むる身なれど雨益々はげしく身の濡れぬ所とは更になかりき。谷もやうく麓に近づけば雨水集まりて碧潭をなし水石相闘ひて天地を撼さんばかりなり、大瀑涼々として絶壁にかゝるものあり。かくても雨の山口に着きたるは宵暗せまる六時過なりき。

とある寺に一夜を求めしは七時過なりしかまづ着物を着かへんとせしに慘なる哉——ヘルの食へるなり、靴の中にて血を流して死せるあり、はては体に登りて血を吸ふものありき。皆の者を鼓舞しつゝ寺の縁に濡着を擴げ、一室に夕餉も終りて炭火に暖たまりつゝまどろみしは十一時過ぎなるべし。明くれば廿七日雨跡方もなく霽れて清朗なる朝なり。午前中は炭火に衣服を乾せり。○時三十分寺を後に相伴ないて出づ阿下喜の町に中食をとりしは午後二時なりき阿下喜も出でて一路桑名に急ぎぬ。沿道の並木揺がせて涼風我頬を撫づ。かゝる並木道は我里にもあり等話しつゝ進む時々輕便電車の走るを見る。やがて長き夏の日も暮れて月出でぬれば我等が旅足自づと急ぎぬ。漸く桑名のある觀音堂に着きたるは八時なり。月明を頼りに天幕を張り炊事を終りぬ。月明に夕餉の筵を敷く又快し。十時一日の疲に夢路に急ぎぬ。廿八日早く

雨益々勵げしく泥水道を覆ふに到れり、暫しをとある人家に憩へり、雨未だ止まず。止むなく晝餉を此所にてすましぬ。午後二時留まること二時間餘にして雨止みぬ。

雲足早く黒雲近く去來すざりとて長くどどまるべくもあらねば村人に厚く謝して去る。村里を去る頃後より人の來るあり、よく見れば此の村の者にして我が舊友なり、我等一行に我あるを見て案内せんとて來るなり。村より半途漸やく途狹まりて夏草道を覆ふ唐松茂りて鬱蒼たり。我先頭になりて進む。道別れるあり、我大なるを取る。舊友曰く君あやまれりと君若し大なる道を行き給はゞ山中に迷はん大なるは山道なり、と、我案内を後にせしを悔いて君が後につく。

進むに伴ひて途益々險しくなりぬ。恨むらくは又雨の降り初めしなり。されど峠も程近しとおぼゆれば友に別れぬとすれど今暫しとて案内す、漸て雨もはげしくなれば友に謝して別れぬ。暗雲足下に去來し冷氣雨と共に身を襲ふなり。險なる哉！峻なる哉！草をわけ木の枝にすがりて終に峠と思ほしき所に辿りつきたるは五時五十分なり。麓より一里半終に我等は國境をきはめたるなり。伊勢の國も來し方も雲の彼方にやあらなむ唯一邊雲ある耳。

暫しの憩もえせずして出發せり日の暮れなんことを恐れても鯛の聲に旅の夢は破られぬ。昨夜炊事せし朝餉をすませて桑名の町に入りぬ、豫期にもあらで淋しき町なり桑名城址も今は跡方も無きとかや。

町を出でて東海道に出でたり、富田の濱に行かんとてなり先づ目につきたるは老松碧空に高き並木なり、風にさゝやく松籟に昔の旅ぞ偲はるる。日正に中天にかゝりて汗玉をなしぬ民家に水をもとめしことのそも幾度ぞや。かくても富田濱に天幕を張りしは正午なりき。海水浴に半日を過ごしぬ、夜は四日市に遊ばんとて一行電車にて行く、夜のことゝて十分見るに由なく十時遂に我等が根據地に歸りたり。雲間がくれに月浮び漁火遠くに點在す、皆の者早や夢路に就きたれど我一人濱に出でて渚にさゝやく波の音に暫し耳をかたむける、尺八の主はいづこならむ濱に遊ぶ影一つ二つあり、やがては漁火一つ二つ消え初めぬ潮のザツザツと寄するあり——満潮ならむ！。かくて夢路に入りたるは十二時過ぎなるべし。

廿九日。連日の疲と昨夜の不眠に由るべし、目覺めたりしは太陽濱に高く蟬木梢に鳴きさかる頃なりき。先づ木葉を集め人家の水に炊しぎて朝食す。濱に別を惜しむいとまもなかりしかば周章として歸宅に着きぬ。富田より桑名——それより阿下喜へと。

山口に着きたる頃は月も出初めぬ——十五夜なり。  
清流のほとりに宿を求む、今宵こそ最後の夜なり。  
御馳走せんとて民家に買ひ求めたり、曰く「蛤」「茄子」「芋」  
「漬物」「菜」「鹽」「醬油」「砂糖」なり、我等が持ち來りし罐詰  
等あり。

樂しき哉快なる哉!!月明に夕餉の筵を敷きぬ。

茶に興ずる者あり、歌ふ者ありさはぐ者あり、亂舞する者  
あり、——皆忘我の境に入りぬ。

かくて最後の夜はふけぬ——。

明くれば卅日我が家に歸らむ日なり。早や四時なるに起き  
出でたり。朝餉も終りて六時出發す。險なり! 慘なり! 鞍  
掛峠を登りぬ。幸なるかな! 天我等をめぐり正午大君畑に  
着きぬ、此所にて少憩、凱歌と共に家路に着きぬ。噫! 想  
へば快なりし我等が旅路かな!

## 第五學年修學旅行記

田村 高 男

第一日(八日)

を出した。僕も早く眠むらう——とあせればあせる程目が冴  
えて寤られぬ。汽車は唯ひた走りに西へ——と走つてゐる。  
轟々と言ふ音に目が覺めて今鐵橋を通つてゐるなと思つてゐ  
る内にやはり寤たらしい。後は何にも知らぬ。

第二日(九日)

朝五時頃目が覺めた。昨夜の寢不足の爲か何となく頭が重  
い。どんよりした目を開いて窓外を眺めると悲しい哉。今日  
は雨だ。雨具を用意して來なかつた者が相當多く大變困つた  
様だつた。宮島より連絡船に乗りかへて雨のそぼ降る中を嚴  
島へ渡つた。そして直ちに嚴島神社に參拜して、畫にも見、  
話でも聞いた通り全神社朱塗りに美しく實に奥ゆかしく感じ  
た。唯残念な事には折から干潮の時だつたので、あの廻廊を  
浸すかと思はれる程満ち——た海水に靜かに映るぼんぼりの  
光に反して廻廊の柱等に、かき等の貝類がくつきいてゐたの  
は著るしく美觀を減じた恨みが有つた。案内人の説明を聞き  
ながら全部拜觀を終へて一同砂の上で豪壯な鳥居を背景とし  
て記念寫眞を撮つた。後から知つた事だが皆の顔は眞黒でま  
るで今煙突から出たばかりと言ふ様な顔にうつてゐた。所  
々に鹿がうづくまつてゐた。少しの休憩時間中に鹿に食物を  
やつたり附近の風景をカメラにをさめたり、杓子に切手を貼

歡喜に踊る胸を押へて、午前中の授業を終へ、用意萬端手  
ぬかりなく、父母に別れをつけて、彦根驛前に集合したのは  
故郷の間が柔かな夕靄に包まれ城山の晚鐘が物淋しく五時を  
報ずる頃であつた。友は皆希望に満ち、元氣に溢れてゐた。  
遂に汽笛一聲汽車は名残りを惜しみ、別れをつける人々を後  
に、若人の喜びをのせて動き出した。何となくわびしい様な  
氣持も、忽ち賑かな雑談高唱のために吹きとばされてしまつ  
た安土附近に於て小高い丘山に古めかしい五重の塔を眺めて  
は遙かに遠い安土桃上時代の盛觀を偲んだ。又武人の鏡と稱  
せられる楠公父子訣別の場所を教へて貰つたが折からの夕靄  
の爲に見ることができなかつたのは残念だつた。とかくする  
内に汽車は京都に着いた。そこで三十分程休憩して下關行の  
準急に乗り換へたもう夜はとつぷり暮れて何物も見えぬ唯走  
り過ぎる驛々のおぼろに照す電燈高く深夜をひどかす警笛の  
音の外は我々の注意を引くものは何にもなかつた。此の列車  
は非常に混雑してゐて、汽車の通路に新聞紙や布を敷いて寢  
たり、或は荷物の様に網棚の上に横になつたりして居るとと  
も眠るどころの騒ぎではなかつた。而かも僕は兩方から腰を  
押へられてゐることと窮屈でたまらなかつた。けれど十二  
時頃になると話聲もやんですう——といふ安らかな寢息も聞

つて故郷への頼りをしたりして遊んだ、かくて再び元の連絡  
線に乗つて宮島に歸り又汽車に乗つて下關に向つた。皆車内  
に入るや否やぐつたりして寢込んでしまつた。大分雨も小降  
りになつた。此の分ならやむかも知れぬと竊かに心中嬉れし  
く思つた。此の附近の土地は松田先生の説明のあつた通り山  
間の盆地多く段立よく發達し又家は五軒ぐらゐるづつあちら  
こちらに散在してゐるのが特に目についた。間もなく下關到  
着直ちに下關門司間の連絡船に乗りこんで門司へ向つた。海  
中にばかり——と浮いてゐるグロテスクなくらげや堂々と國  
旗を翻してゐる外國船等は二日の間汽車にゆられゆられて來  
た私達の目を喜ばさずにはおかなかつた。僅か十五分位の間  
に門司に到着し九州への第一歩を力強く踏んだ。宏壯な但し  
東京大阪とは又異なつた趣の有る異國の町門司港の附近に  
は、とても大きなよく熟したバナ、をこまかしこで賣つてゐ  
る、少し買つて食べたが長い間汽車や汽船にばかり乗つて來  
たのでおいしくあるべきバナ、も何の味も無かつた。門司よ  
り又嫌な汽車で北九州の大都會博多へ或は福岡兩市は全く接  
近してゐて區別がつかぬへ向ふ。汽車はごとくとゆつとく  
り海岸に沿つて走る。丁度北陸線がマツチ箱式の貨車を用つ  
てゐた時代を思ひ出させた。併し、附近はやはり北九州工業

地帯だけあつて天に沖する墨煙を吐く大煙突が何十本となく並んでゐた。途中八幡の製鐵所をカメラに入れようとしたが駄目だつた。附近の景色も本州のそれと異なり岩を噛み白沫を飛ばす玄海灘の荒波は實に私達を恍惚たらしめた。遂に福岡へつき驛前の高島旅館についた時は一同ほつと一息ついた食後一風呂浴びてシャツを着かへた時は全く生きかへつた様な気がした。友と連れ立つて町を散歩したが東京を見た我々の目には福岡平野の大自然博多も餘りに期待に添はず一平凡な都市に過ぎなかつた。町の大部分の商店は博多人形を賣つてゐる。十時頃宿に歸つてなつかしい床についた。やはり暖國だ。何だかむし暑くて寝られない。淋しく響く電車の音とともに博多の夜は靜かに暮れてゆく。

### 第三日(十日)

六時起床。今日は昨日の陰鬱さは忘れられたかの様に全くの快晴だ。直ちに電車に乗つて市の北方の西公園へ向ふ。此の日は日曜の爲か特に人出が多く来る電車も来る電車も人の鈴なりだ。やつとの事で一電車に乗る事が出来、市中を横ぎつて西公園に到着した。公園には野球、テニス、ランニング等が盛に行はれてゐて更にスポーツ全盛時代の感を深からしめた龜山上皇の颯相たる御英姿の下に「敵國降伏」の四大字を拜

やりと波一つなく鏡の様な海面に霞んで横たはり微風はそよ／＼と頬をなでて實に氣持が好い。博多から汽車にのつて五六分もたない内に二日市に着いた。凸凹の多いセメントを敷いた道を通つて太宰府神社に参拜した。當神社は官幣大社としては餘り立派ではないが古めかしく嚴かで何となく私達に畏敬の念を起さずには置かない何物かがある。又境内は菅公が平生梅をお好みになつた爲だらう、木と言ふ木は全く梅の木ばかりである。つい私は咽喉の渴きの爲に梅の實の誘惑に耐へきれず二三を失敬した。忽ち神罰を蒙つてか、腹痛を起したが、幸ひ無事に治まつた、當神社内には又個人經營の歴史館があつた。期待して入つた所が、何のその、泥で造つた人形に立派な衣裳を着せて、それで菅公の一代記を示したものだつたので、一同はあいた口がふさがらなかつた。入場料の拾銭が惜しかつた位だ、おまけにそれがために時間が大分遅れて停車場まで走らされた。これも又神罰か？それでなくとも十分疲れてゐたのだから實に苦しかつた。二日市を出發して熊本に向つた。途中ハゼの木が珍らしかつた。又綿工業地帯の中心久留米を通つた。熊本城!!それは敷地からいふと彦根城に優るが構造上に於いては我に一歩の長があるのであるまいか。もつとも天守閣は西南戦争の時焼け落ちてし

しては元寇時代に上皇が長くも身を以て國難に當らうとせられた苦しいお胸中をお察し申し上げてしばし感慨無量だつた更に眼を左方に轉すると珠數をつまぐつた高さ數丈に及ぶ日蓮上人の立像を拜した私達が奇異の目で見守つてゐる中を更にあたりには目もくれず素足で念佛を唱へながらその立像の周圍を廻る人々を見ました。何と信仰の力の偉大なることよこの公園は緑滴るばかりの小松に圍まれ白い小砂が一面に敷いてあり如何にも九州の工業地帯にふさはしい公園だつた。

直ちに側に建てられた寺院式の歴史館に入り元寇時代の遺物や古代の農具等を見物した。彼の國の兜や鎧は皆鐵で造られてあり又何等の裝飾もなく唯兜の先から背中の方へ赤い毛が長く垂れてゐるのみであるのに反して我が國の甲冑刀劍の類は優雅であつたのは我が大和民族の藝術的才能の豊富なることを如實に示してゐて愉快だつた。又我が國古代の貨幣や石器時代の農業の道具等を見今野先生の講義に参照して大いに得る所があつた。それから更に電車で東公園に向つた。西公園の向ひ側にあるから此の名があるのださうだ。東公園は西公園の松に反して梅の木が多くその大きさ及び遊覽設備の點に於ては西公園の全く敵では無かつたけれども公園のベンチに腰かけて足下の博多灣を瞰下すると遙か彼方に志賀島がぼん

まつて現存してゐないのだが、櫓の上に登つて熊本全市を俯瞰したが彦根の如くやはり城下町としての類例に洩れず文化の歩みは遅々たる感が有つた。當市は歩兵、野砲の聯隊や師團の所在地であるので道を歩いてゐてもよく元氣のよい兵隊さんを見掛けた。旅館に少し足を休めてから市を一巡したがやはり福岡と同じ様な状態で見える様な所は少しもない。宿に早く歸つて寝るの床についた。僕等の外出中、自修館の生徒が、喧嘩を賣りに來たさうだが、先生の巧みな御計らひで事無きを得たのは幸ひだつた。床につけば三日間の樂しかつた事が走馬燈の様に見えては去る、時計は十一時を今將に指さうとしてゐる。あゝ明日は、待ちに待つたうれしい阿蘇登山だ。早く寝て元氣を養つておかう。

### 第四日(十一日)

朝四時起床、食後直ちに服裝を整へ門前に集合して天を見上ぐればあゝ今日も雨だ。天は何故一生に一度しか登らない様な阿蘇登山のこの日にかくも悲惨な目に遇せるのであらうか。一同大息して天を仰げば春雨が絲の様に細く長く落ちて來る、けれども、行く迄に、雨の止むかも分らないから否止む様に心の中で祈りながら、元氣を奮ひ出して出發した。熊本より汽車で山麓の坊中に着き、その休憩所で一同は登

山の用意をするのだつた。どうにも雨は止みさうにも無い。一枚三〇銭のカツバを買つて身に着け後になつて此のカツバは普通の紙に油を流した位の粗末な物だつた事を知つたか杖を買つて登山仕度を整へた。カツバを紐で腰のあたりにくくつた様子は、實に奇妙な格好で今思ひ出しても思はず笑へて来る。附近投宿の女學生が二階から手を叩いて笑つてゐたには無理もなかつたが實に閉口したが併し一同は元氣よく杖を振りながら校歌を歌つて阿蘇登山の一步を力強く踏み出したところが五、六町も登れば皆疲れたのか、歌聲は全くなくなり、靜かに否苦しさうに登り出した。雄大な阿蘇の緑茂き山麓に、楽しさうに草を食ふ放牧の馬の群を今日は全くその影をかくし、僅か一、二頭の牛が折からの雨にぬれて、しよんぼりと立つて居るのも哀れである。厚い真黒い火山灰が溜つてゐる道をふみしめ、五合目の休憩所にやつと到着した。その時はもはやカツバは雨を通してしまつて、そのために服は全くぬれてしまひ雨は休の中まで浸みこんで来た。實に冷めたい。凍つてしまひさうだ。早く登つてしまへば何とかなるだらうと唯そればかりを念頭に一步々力なく歩みを續けた。登れど、盡きせぬ山道、一滴一滴身に浸む寒さ、全く泣くにも泣けなかつた。やうやく山頂の茶屋を見つけた時は

蘇生の思がして思はず知らず茶屋に馳け上つた。茶屋では何等の設備も設けられてゐないので一同はブルブルふるへながらパチン／＼に凍つた晝食を終へてもう何の役にも立たぬカツバなんぞは其の場へ投げ捨てしまつて一同は一散に噴火口へ走つた。噴火口!!!それは直径一四乃至二町深さは百丈餘りで可成急な傾斜をして底に達してゐた。五つ位あつた内三つ位は硫化水素の白煙を濃々と出してゐた様に覺えてゐる。白煙天に沖する様な壯觀は全くなく、唯底の方でくすぼつてゐただけだ。聞く所によると二、三日前に飛込心中をした二人の死骸が岩石にひつかゝる事なしに底に落ちてしまつたので、之ばかりは青年團も取出す事が出来ず、そのまゝ放置してあるさうだ。それが風が吹いて白煙を散らす度毎に見えるさうだが、幸か不幸か僕等は誰れも見た者がなかつた。雨は益々猛烈さを加へて来る、寒さは骨の髄迄もしみこんでくる期待してゐた阿蘇もこの有様だ。噴火口の周圍を一巡するや後をも見ずに一目散に麓めがけて馳け下りた。泥が顔となく背中となく一杯にはね上つてゐる様は可笑しいと言ふよりも寧ろ悲惨である、麓の茶屋の人々が焚いてくれた焚火で服や帽子を乾した。ノートや財布の中の紙幣は雨の爲にぐしやぐしやだ。一度宿へ行つた方がよからうと言ふのでとにかく生

乾きの服を着て汽車に乗り別府に向つた。海岸通りの榮屋に投宿。宿で着物を乾してから散歩に出掛けたがやはり温泉地特有の町であると言ふ感じの外は何の感想も與へなかつた。歸りに道を間違へて雨のしよぼ降る中を三時間も町をうろつき廻つたには閉口した。あゝ今日は悪日だ悪日だ。

#### 第五日(十二日)

昨日の疲勞の爲、豫定を變更して朝六時に起床。食後別府より中津に向ひそこより耶馬溪線に乗返へて羅漢寺驛に到着した。それから隊伍を正して急な坂道を登り羅漢寺に参拜、此の寺は斷崖絶壁の好位置に位する上に緑滴るばかりの木々に圍まれて眞に天下の絶景である當寺は何のいはれがあるかしらないけれど大小とりどりの杓子が無數に掲げられてあつたのは奇妙だつた。一同そこで記念寫眞をうつして直ちに下山それから青の洞門を見物する爲に濁流岩を嚙む山國川に沿つて上つて行つた。一僧があらゆる迫害身にしむ艱難を物とせす遂に完成したと言ふ青の洞門、それは其の後近代の裝飾を加へられたトンネルの横にその痕跡を留めてゐる。此の日は快晴であつたが皆の反對意見のため深耶馬溪には行かず直ちに中津に歸つて休んだ。暫く市内を見學し早く歸つて床についた。此所でも他校生と間違へられて喧嘩を吹掛けられ

たが喧嘩にはならなかつた。旅行中宿屋に泊るのも今晚限りだ何となく名残り惜しい様な氣がする。夜は我等の心を知らざる如く靜かに容赦なく更けて行く。

#### 第六日(十三日)

朝六時起床今日は稀に見る快晴の日だ。愈々九州旅行の最終の日である。旅館も出發して、宇佐に到着し更に参宮線に乗換へて宇佐八幡宮に参拜した。鬱蒼と茂る杉の木に圍まれ古めかしく聳える神社は莊嚴そのもの、様な感じを與へる。暫くの休憩の後、當社を後にして龜川に到着し、九州の名物たる地獄めぐりの爲遊覽バスに乗込んだ。附近の風景を歌にして、綺麗な聲で説明する女車掌を中心に、一同はあたりの景色に恍惚として見とれた。清朗な柔い日光を満身に浴びて所々に濛々と湧き上る温泉を左右に眺めて、坦々たる道路をドライブする心地好さ。第一に到着したのは鶴見地獄深さ四百尺餘りの地下に續く細長い穴から、攝氏二〇度位の熱湯が盛んに湧出してゐる様は實に壯大と言ふより外に適切な言葉はなからう。附近には湯の花や、その他温泉で取れる薬品を賣る店がすつと並んでゐるのも、亦一つの温泉地でなければ見られぬ風景だ。更に自動車を馳つて、左に靜かに横たはる海を眺め右に緩かに傾斜する緑の山を眺めつゝ、坊主地獄

に到着。此の地獄は底の泥が、下から噴き出す水蒸氣のために、ぶつとふくれて坊主の頭の格好をし、又割れて元通りになり又ふくれると言ふ様な事を繰り返してゐるから、此の名を頂戴したのださうだ。尙此の附近は丁度こちらで、井戸が何處にも掘つてある様に、此所では一軒に一つづつ位温泉が白煙を濛々とたてゝゐる。更に青々として、さながら深海を聯想さす海地獄、眞赤な毒々しい血を噴き出してゐる様な血ノ池地獄を見物して、名残り惜しくも本旅行最後のプログラムを終つた。別府でいよゝ九州地方の最後のお別れとして、三時間程ぶらついて、午後六時蕘丸で懐しの故郷米原へ向つた。別れを惜しむかの様に長い〳〵赤白のテープを船舷につけて船は波をけたてゝひた走りに大阪へ向つた。暮色につゞまれて、おもむろに消え去る九州よ、さらば永遠にさようなら。船中にては天王寺商業と一緒だつたが仲よく遊んだ一同の哄笑と追憶の内に旅行最終の夜は更けて行く。

第七日(十四日)

ぼう!!!と言ふにぶい汽笛の音に、目が覺めた。甲板に出て見たら、高松港に船は入港したらしい。荷上げの掛聲がかすかに靜かな朝の空氣を破つて聞えてくる、東方の空が微かに赤い残月が淡く中天に懸つてゐる。まだ四時だ。もう一度瘴

ようと思つて又船中に入つた。午後一時大阪港の波止場に汽船蕘丸は横づけにされた。電車に乗つて大阪驛に着いて見れば豫定の時間とは少し早かつたが直ちに汽車に乗り、戀しい故郷へと向つた。車中の人となるや否や、七日間の疲れが一時に出て、ぐつすり寝こんでしまつた。目が覺めた時は彦根のすぐ手前だつた。遂に列車は靜かに彦根驛に滑り込んだ。友達は兩親や知人に迎へられて楽しい家路についた。

嗚呼遂に中學時代最後の修學旅行も終りをつけた。七日間の面白かつた事や悲しかつた事が今更の様に目の前に浮ぶ。

(終り)

## 第四學年修學旅行記

第一日(五月十一日)

午後五時十分彦根驛前集合 五時五十八分彦根發

空はどんよりと曇り小雨すら降り注ぎ吾等彦根中學校第四學年健兒は校長先生を始めとして、諸先生の見送りを受け、今や夕靄に包まれようとする金龜城に暫しの別れを告げて、黒煙をブラットフォームに残した。細雨益々降り注ぎ雨滴窓

に玉をなす、河瀬稻枝と近江盆地のパンラマが左右に展開し紫雲英の毛氈が敷かれてゐる。懐かしい湖國は一刻々々後に残されて行く。やがて日はとつぷりと暮れ、夕闇は湖面を蔽うてしまつた。右窓を見れば比叡の燈火が中天に輝き、大津膳所の燈火湖水に映じて金波銀波を漂はしてゐる。實に天下の絶景だ。逢坂山のトンネルも何時しか過ぎて、七時三十八分京都驛に着いた。

夜の京都驛は何んとなく淋しい。ブラットフォームを歩く人々の足駄の音は澄んで聞える。電燈は青白く線路の上を照らし、雨は絹糸のやうに光つて旅情をそゝる。

下關行列車に乗換、八時三十二分出發。

睡眠不足のためか、眠りを催し、轉寢の中に大阪到着。

乗降客の多いこと、さすが西日本の一大中心だ。やがて汽車は淀川の鐵橋にさしかゝる。水に映る大ビルディングの燈の影の秀麗さに、思はず「水の都」の景を讚美せずには居られなかつた。阪神街道は鐵道に並行して長く一筋に伴ふ。西の宮神戸と次ぎ〳〵幽玄の境に魅せられて、心は恍惚として、其の景色に見入るばかりである。汽車は西に向つて、闇黒の世界から闇黒の世界へと募進する。一の谷の古戰場、須磨、明石の勝景地、姫路の白鷺城、赤穂の鹽田、岡山の鳥城等を

頭に思ひ浮べつゝ、ただ沈黙を守るのみだ。窓越しに見ると麥田が車側に連らなり、村々の燈火が戸隙より漏れてゐる、いつの間にか知らず識らず夢路を辿る。……

「おい、もう起きないか。よく寝たねと友達に揺すられて目を覺して見ると、吾等は山の間を走つてゐた。雨はまだ降つてゐるが、見馴れぬ國の景色に目を引かれて、心は全く澄み切つて、汽車の歌が流れ出さうだ。あだかも、無邪氣な小學校の一年生にでも戻つたかのやうに。やがて吳線との分岐點たる海田市を過ぎ、更に廣島を過ぐれば、汽車は山間を走つたり、海岸を走つたり、或はトンネルを抜けたかと思へば、目の下には波が打寄せてゐる。廣島灣の彼方を臨めば大小の島嶼連に漂ひ、漁船が彼方、此方に逍遙してゐる。さすが南の地で暖いと見えて無花果の木が太く、松の葉が淡黒い。田甫は階段狀の山田である。

前川 覺

「前川君よく眠つたね」「あゝまだ」三時半過ぎだ」大低眠つてゐるよ、君は?」「僕は一睡も出来ないよ」且君は苦笑した。もう眠れないので、洗面所へ行く。外はまだ薄暗い、冷たい外氣に頬を當ると、とても氣持がいい。夜は明けた列車は

間もなく廣島につく、五時半過ぎだ。もう半時間で宮島だ。下車の用意だ!!意地の悪い絲の様な春雨が降つてゐる。下車すると、汽車の時間と連絡した小蒸汽船がある。我等はこれで十六分で嚴島へついた。官幣中社嚴島神社へ参拜する。神社は大宮及び客神社の二大部より成り、大宮、寶殿は其中央に有り、拜殿、祓殿其間に有り祓殿の前に高舞臺、其左右に平舞臺有り、樂房有り、寶殿の左右には廻廊有り、一間毎に燈籠が釣つて有る。潮が満ちて来ると百燈は長く照映して、光彩陸離名状すべからずの美觀を呈するのである。有名な海中の大鳥居は、火燒前の七十間前方の軟沙の上に立つてゐる。満潮の際には、参詣の舟が白帆を上げて潜り入る事が出来るさうだ。社殿の後方に「鏡が池」が有り、陶晴賢の陣を構へた「塔岡」といふ處が有り、いづれも歴史上有名な所である。参拜を終り鹿(神社が飼養してゐるもの)を入れた記念撮影をした。そこで一時間足らず解散。早速土産物を賣る店で、繪葉書やしゃもじを求めて、友達や家の妹に出した。……旅行はとても愉快ですと、書きそへて、指定の船乗場へ集合、再び小蒸汽船で宮島に向ふ。時に、春雨はまだ頻りに降つてゐた。宮島の宿屋にあづけた靴を取りに行き、宮島發十時十分の列車で下關へ向ふ。車中で持参の辨當に手をつける。雨

具の用意をして来なかつたので、友達の手に入れてもらったが、大分嚴島でぬれたので氣持が悪い。カラーも大分黒くなつてきたので、持参のカラーと取替へる。下關着午後三時十分。直ちに連絡船に乗る。この船は門司港まで十八分かゝるし、朝鮮の釜山への連絡は、晝夜二度の便が有るといふ、船は何時の間にか白い波がふなべりをかむ程のスピードだ。船は小さな島を迂廻したと晝の様な(美しい景色が)僕の視野にパツと飛びこんだ。何といふ美しくさだ。美しい門司の港が、紺青の大空と共に、僕等の眼前にくりひろげられたのだ。南國の薫風がすう／＼と頬をなでて過ぎて行く。すべてが我等の内心の靈をゆり醒ますのか?。人の世の樂しさ、美しさ生けるものゝ歡喜で胸は一杯だ。シラーも云つた「この地尙美し。人たる事も亦一の喜びなり」と。船は門司についた。門司發四時十五分博多に向ふ。

列車は海岸に沿ふて走る。車窓の右に筑豊諸地の煤炭累累として、我等をして九州の富を想はしめる。大里の海濱は企救の高濱といひ、白沙青松長く連り、風光が良い。こゝを後にすると、我等の視野に有名な玄海灘が入り来る。戸畑より列車は洞海の東南岸に沿ふて走り、右に八幡の製鐵所が見えぬ。無數の煙突は林立し煤煙は空を覆ひ、對岸の若松港は指

點せられる。香椎箱崎間をゆるやかに流れて、海に入る川は多々良川である。足利尊代が西に走つた時、肥後の菊地氏が吉野朝の爲に屢々小貳大友と戦つた所で、歴史上名高い川だ。博多着六時十九分。今夜は驛前の高島屋旅館で一泊するのだ。ゲートルを取り、靴をぬいで、我等二組の一班に定められたる二階へ行く。風呂だ!!夕飯だ!!九時半まで自由行動ときまる。疲れてはゐたが、外出をして土産に博多人形の小さいのを買ふ。妹にやるつもりだ。福岡市は黒田氏二十一萬石の舊城下で人口は約九萬五千を有し、有名な博多人形、博多織、博多焼の名産がある。僕が歸つたのは八時前だつた。だん／＼宿屋へ歸つてくる。

皆何か土産物を買つて来る、中には大きな博多人形を買つて来たのもあつた。T君が果物や菓子を買つて来て、僕等に御馳走してくれた。九時頃まで愉快に雑談した。九時半消燈。明日は早いので早くねつかうとしたが、夢の中で一時を聞いた。

五月十三日

夏川文二郎

喧噪に驚いて飛び起きれば未だ黎明前の五時。朝食後、辨當をぶらさげて旅館を出る。早やコバルトの空はからりと晴

れ、清透の氣は萬物を蔽ひ絶好の旅行日和だ。中垣先生が案内して下さつた。大厦高樓櫛比して、交通繁華を極める街衢を通り、箱崎に向ふ。電車より見る福岡市は、近代標識的の都會である。もの寂びた舞鶴城があつて、然も古城市では無い。リズムの躍動し堂々九州第一の貴録を充分に示してゐる活潑な城下町だ。箱崎に着く。神殿莊重、古色蒼然たる八幡宮に詣で、伏敵門にぬかずいて、少時元寇の昔を偲ぶ、仰げば「敵國降伏」の四大字は儼然として、遙か彼方、元の地を睥睨してゐるかの様次いで風韻掬すべきお沙井道を右に見て松原續き、四時散策の士絶え無い東公園の翠色に接する。突如、空を壓して屹立する銅像二つ!私はその姿を仰ぎ見て、直ちに一つは傑僧日蓮上人、他は龜山上皇の其れであるのを知つた。先づ巨大な日蓮像に拜伏する。絶える事無き香煙の中に儼然として海を望んで聳ゆる像の前に、高らかに題目を唱へ續ける求道者の群、其れは老若男女様々であるが、何れも眞剣な勤行の様を見た時、私は一種言ふに言はれない敬虔の念に打たれて頭の自づと下るのを覺えた。次に蒙古の來寇を記念すべく毅然として雲表に聳ゆる龜山上皇の尊像を拜して、身を以て國難に代らんとせられた御聖徳を偲び、更に丘上より眼を移せば、肩睫の間に九州帝大醫學部がある。かく

て盡きせぬ名残を惜しみつゝ、電車で西公園に向ふ。途中再び古城を通過する時、忘れてゐた彦根を思ひ出した。輪廓の美、堂々たる福岡縣廳を過ぎ、西公園に着く。先づ光雲神社に参拜する。園は荒津山一帯の地域で、翠綠色濃く蟬聲あたりに満ちて、此れが五月中ばかりと奇異の感を深くした。丘上の眺望臺より瞰下すれば、遙かに志賀の陸連島、及び此れに續く（海の中道で名高い）連撃砂嘴、近く残、鶴來の二島、又市街の盡くる所、航空輸送の重點たる名島飛行場を眺め得る。博多灣は漣波穩かにして白帆往來し、青空の片雲影を逆に寫して風光明媚の境である。此所で記念撮影をする。斯くて憧憬の地博多に別離の哀愁を覺えつゝ、車中の人となつたのは九時五十三分であつた。

二日市驛にて下車し、荷物を驛前の旅館に托して黒い幅廣い電車に乗り替へて、太宰府に向ふ。皆は旅の疲れも見せず益々元氣である。青田の中に群がる新緑の林も瞬時にして過ぎやがて太宰府に到着する。此處は菅原道真公流謫薨去の地である。石疊の參道を通り、巨大な石鳥居を潜つて境内に進めば、寂然たる神池があり太鼓橋が架してある。池中には數百の眞鯉、鯉が或ひは躍り或ひは群遊してゐる。境内は廣潤にして梅樹數千本に餘り、神殿樓門の麗と山水の美と相映

地鳥栖を過ぎ筑後川の鐵橋を渡つて、筑紫平野の大中心久留米の商工都市に着く。此の前後より沿線に櫛の木多く、青毛氈を布いて長々と續いてゐる。私はついでと眠つてしまひ、ゴーゴーたる大音響に驚いて眼を覺ませば汽車は早や歴史に名高い菊池川を渡つてゐた。多良、温泉の兩岳や、三池大牟田の近代化學都市を夢の中に通過してしまつたかと思へば、思はず悲鳴に似た聲が出て來る。少時して田原坂の古戰場を左手に見る。同席の一老人の話に依れば、山が鐵路に迫つてゐる所「松林の連續地」其れが激戦址だとか？

間も無く熊本驛に着き荷物を自動車に托して、電車にて熊本城に向ふ。城の入口に忠臣谷村計介の乞食姿の像が銀杏城の守護として屹立してゐた。城學高く、上るに隨ひ道は急勾配となつてゐる。老松鬱蒼として晝尙暗く、小鳥の囀り鳴く所、神韻漂渺としてゐる。赤煉瓦作り嚴めしい師團司令部を横に見て頂上に達する。此の銀杏城は慶長年間、加藤清正公の築造せられたもので、城内に井戸無慮百餘、之は清正公が朝鮮蔚山に於ける籠城にて幾多の辛酸を嘗められた擧句、其の實際の經驗を基礎として苦心慘澹遂に設計成つて出來上つた天下の名城であるとのことである。明治十年西南の役の際、谷干城將軍の善戦された地であることは世人の善く知る

じて仙境に遊ぶ思ひがある。又九州地方の名木である樟樹數十株が老杉と共に亭々として中天に聳え、枝葉天に繁茂して社頭の森嚴を添へてゐる。拜殿の右手に一老梅がある。之は菅公を慕つて飛んで來たと言ふ傳説で名高い「飛梅」であつて、靜かに在りし昔を物語つてゐる。社前に額けば、思は千年の昔に歸り、住み慣れた紅梅殿を出て庭前の梅を顧みて「東風吹かば匂起せよ梅の花、主人無しとて春な忘れそ」と詠じ、悄然として配所に向はれし公の心中を思ひ遣る時、悲涙に溢れて數行頬に下るのを覺えた。時間が無いので期待してゐた都府樓址を見學するのは割愛して、其の代り歴史館に入る菅公一代の歴史が收めてある。其の中に都府樓の模様があつて、其の註に曰く「……東廳西廳中門、其の結構莊麗にして朱丹の柱朝陽夕月に相映ず、年を経ること幾百星霜、樓は既に湮滅して僅かに礎石を留むるのみ」と都府樓とは都督府の樓の略で、天智天皇の御宇始めて鎮西守護として建設せられたのであるとの事だ。電車で二日市に歸り再び汽車に投じて熊本を目指して旅を續けた。辨當を食べてゐる者、トランプをしてゐる一團、さうかと思ふと殊勝にも日記に書きつまつて切りに頭をひねつてゐる者等々……車中は賑かに色々な情景を醸し出してゐる。何處か米原に似た點の有る鐵道要

所である。天守閣址は徒らに荒れて悲しくも將軍奮戦の様を物語つてゐるかの如く、老杉に宿る風音も何となく悲痛に聞きなされる。「此の時薩南健兒は遙か彼方淡く夢の如く浮び出てゐる花岡山に砲列を布き、熊本城を砲撃せり。」と文學書に出てゐる。城丘より熊本市を瞰下すれば、市役所、縣廳等の高層建築は指呼の間にあり、市内至る所樹木繁茂して、大げさに言へば森林中の都市の様である。此れは熊本市の一大特色で上天を蔽ふ空氣も何と無く晴朗としてゐる様だ。現存中の唯一の櫓たる宇土櫓や、午砲を見て城を下り、再び電車にて成趣園（水前寺）に行く。園は清水湧出し、木石の配置雅麗にして實に塵外別境の感がある。殊に青草萌ゆる緩やかなスロープの麓、汀に立つて池中に餌を投げ入れれば、數百の清魚潑刺として群遊し來り、其の風趣は眞に筆舌に盡くし難いものがある。園内には動物園、細川家歴代の祖を祭る出水神社等がある。少時庭園を逍遙して其の絶景に陶醉した。やがて今宵の宿泊所たる坂本旅館に行き、直ちに旅の疲れを休める爲、又一つには明日の阿蘇登山に備へんが爲に就寝する。

五月十四日

郡田 浩 次

朝四時半起床いよ／＼今日は阿蘇登山だ。まだ寝足りない

目をこすつて朝飯を終り荷物を宿に預けて輕装して驛に向つた。驛にはすでに二三の學校の生徒が行つて居た。彼等も僕等と共に今日阿蘇に登らうとするのだ。六時熊本を發して坊中驛に向つた。汽車の進むにつれて勾配が急になり河谷に沿うてあへぎ／＼汽車は登る。外輪山を越すのだ。立野驛を出ると汽車は前後に機關車をつけて進んだり戻つたりして高く登つて行く。谷は段々と上が廣く下が狭くなつて行く。これは段丘といふものだと思はれた。汽車が登るにつれて外輪山の頂上がみな水平に平原状になつてぐるつと我々の居る土地を取巻いてゐるのがよく見えて來る。水力電氣の發電所が多く數多の鐵管が山にかゝつてゐる。白川と黒川とが合して外輪山の一部を破つて外に出てゐる。その峽流がはるか數十尺の目の下に流れてゐて清涼な感じがする。火口原の中を進むにつれて其の大きさをしみて味つた。中岳、高岳、烏帽子岳等の山々がいよ／＼近く見えて來る。遂に坊中驛に下車すぐに阿蘇登山のために出發した。はや坊中の町を離れると坂道だ。これから二里餘の道を登つて火口を極めようとするのだ。自ら足に勇氣が入る。一合目、今まであつた樹木は丁度こゝで終つて、これからは草ばかりだ。しばらくこゝで暫く休憩した。この所で放牧の馬を見た。清い空氣を吸つて太

陽の光に浮んで露にぬれた緑の草を思ふ存分食べて廣い天地を走り廻つて遊んでゐるこの土地の馬はどれほど幸福であらうと思つた。

あの青空に高くそびえてゐる中岳を目指して我々は登つてゐるのだ。併し人間がこの大きな山に比べて如何に小なる動物であることよ。實に人間もこの自然に對してはたゞ幼兒の様である。二合目、三合目だん／＼道は急になり登山道も石ばかりになる。三合目で又休息した。こゝで案内人から阿蘇山の大体の説明を聞いた。それによればこの外輪山は世界一のもので南北直徑六里東西四里其の周圍は實に約三十里で標式的複式火山だと言ふ。

我々は一本十錢のラムネを食ひながらこの世界一の大火山の雄大な絶景をいつまでも見てゐた。更に勇を鼓して登つた。一步一步噴火口に近づくと疲れがますます加はつて來た。併し我々の噴火口を見たい熱望はこんな疲勞ぐらゐ蹴飛ばしてしまつた。噴火口の煙が見えた。もうすぐだ我々は最後の勇氣を出して登りに登つた。だん／＼硫黄臭くなつて咽喉が渴いた様な氣持がして來た。萬歳！遂に我々は阿蘇を征服した。

我々は汗を流し苦痛を忍んで登つた努力の代償としてこの

大自然的の神秘極りない盛觀を見る喜びを得たのである。眼下に見下す噴火口の盛觀殆んど筆舌の及ぶ所ではない。底に怒り狂ふ自然の力は何物をも引きつけずには居られぬ力で我々を中に吸ひつけるやうに思はれ、その底知れぬ無意味な鳴動は今にも天地を覆うて我が地球が亡びてしまふのではないかと思はれるばかりである。はるか數十尺の目下にある摺鉢形の火口の底にも昨年までは熱湯が一杯たゞへてゐたさうだが今はその縁に一ぱい硫黄が表れて出て其の黄色な色がよく上から認められた。亞硫酸ガスを盛に噴出し、風の向きによつては我等をその煙の中に包んでしまふこともあつた。

一同火山の煙を背景に記念撮影をしてそれから各自下山した。下りは溶岩ばかりの路を一里ばかりも走り下りた。どこまで行つても足が止まらない。またたく間に三合目の茶屋に到着した。こゝで辨當を食べて坊中驛に集合午後一時三十分の汽車で熊本に歸つた。

更に熊本で鹿兒島行き列車に乗り換へ三時五十二分熊本を出た。左窓は山が近く迫り、右窓の下はすぐ海に接し山と海との間のごく狭い土地を進んで行く、三太郎越の所が山が海に接して汽車はトンネルで越える。又勾配が急である。さうして親不知の難所もある。このあたりは風景が非常によい

八代海を距て、天草島が見られる。殆んど海岸と平行に走つてゐるが米ノ津より少し山と海とに遠ざかつて平地に出る。

この地方の人の言葉は殆んど判らない。向ふの人から色々僕等に問を發するけれどもさつぱり判らない。僕はなるほど九州だと思つた。阿久根あたりを進行してゐるころ日はまつたく暮れてしまつた。退屈な夜汽車に三時間ばかり揺られて十時過ぎ鹿兒島に着いた。其の夜宿に着いたのが十一時頃最早外出も出來ず晝の登山のつかれでぐつすり寝込んでしまつた。

五月十五日

北川 宗 四 郎

五時起床。昨日の阿蘇登山で疲勞し切つてゐた身体は僅か五時間足らずの睡眠では恢復されさうになかつた。おまけに朝飯はぼろ／＼でまるで石礫の様だ。盛んに不平の連發爆發

六時出發。どんよりと曇つた空は、南國特有の暖氣を交へて前途に一抹の暗影を投じてゐる。先づ照國神社に参拜島津公の銅像が朝靄の中にしつとりと黒ずんでゐる。急勾配の城山を登る。昨日の登山で身心共に疲勞し切つてゐる我々にとつては、この急傾斜の山道には殆んど歩行が出来ない程の苦痛だつた。やがてじつとりと露を置かれた小路を通り鹿兒島



全市一望の中に收め得る小丘に辿り着いた。鹿兒島灣は薄黒く煙されて市を包んでゐる。其の後には櫻島が悠然として聳え其の上半は僅な白雲に洗はれてゐる。時々思ひ出したかの如き蒸し暑い大氣が頬を掠める。維新當時の動的な存在は今日の鹿兒島市には少しも認めることが出来ぬ。過去の動より現在の靜へ移動した詩の國南國情緒濃やかなる鹿兒島を形成してゐる。城山を廻り所々で南洲翁の遺蹟に接し急傾斜の地を下る。

翁時に利あらずして可愛嶽突破の後城山陥落の日まで一孤山を死守し軍議されし一洞穴有り。一觀すれば方一間餘りの少區域にして左方は石段により奥深く通じ入口は樹木鬱蒼として蔽はれ、當時を回顧して感懐無量である。道は又それで石段を登る。南洲翁の墓及び戦死した幕下の勇士の靈は萬恨の恨みを呑んで連つてゐる。我等は其の前にぬかずいて在りし日の彼の偉業と風采とを偲んだ。それより少し下り古びれた建物の中に嚴然として市を俯瞰して屹立してゐる翁の木像に接したおゝ其の風采其の眉其の口……我等は或る一つの不思議な力で壓しつけられた様な壓迫を感じた。我等は彼南洲の擧兵の心境を偲ぶ時彼に對して又一掬の涙を送らざるを得なかつた。下山した頃今まで耐へに耐へてゐた天候は、遂に

我慢し切れ無い様にほと／＼と雨を降らし出した。雨に煙る市中を通り驛に着く。九時十五分發列車で又我等はあはたゞしい旅を續けねばならなかつた。發車頃より全くの本降りとなつて窓硝子の水滴も次第に大きくなつた。汽車は其の豪雨を衝いて一散に走る走る。車窓より外を見ればたゞ單調な緑の山のみで行けども行けども緑と雨との交錯だ。軽い睡眠より目醒めた頃汽車は大淀驛に靜かに其の車体を横づけにしてゐた。ざあ／＼物凄い勢で荒れ狂ふ、前後左右縦横十文字一瞬の間に服巻ゲートルがずぶ濡れになる。餘りの烈しさ餘りの天の暴虐さにあきれれる。

傘の骨を二三本犠牲にして漸く青島行きのがた列車の中にもぐり込んだ。がた／＼音だけは馬鹿に大きく動揺も又烈しいまるで十九世紀の遺骸の様だ其の上外の豪雨と相まつて一層我々の心を心細く淋しくする。約四十分位で青島驛に着き狭苦しい煤けた待合所に風雨を避ける待てども／＼一向あがりさうにない。豪雨は殆んど地に平行に疾馳する草木は「く」の字形に折し曲げられて、我々のある待合室が空に舞ひ上りさうだ。一時間經過しただが駄目だ。折角こゝまで來ながらむざ／＼天下の名勝青島を見ずに歸るのは餘りにも心残りな残念な事である。時々血迷つた様に側面より吹き込んでく

る風雨の爲めに狭い待合所も我々も共に遙天空に飛び去らんとかと思はる。中にはあきらめ切れぬ者もあつて豪雨を衝いて出發したが、たゞ徒らにぬれ鼠になる許りだ。だが而し見よ……奇蹟だ!!!。全く奇蹟だ!!!。さしも荒れ狂つた豪雨も次第に収まり行くではないか。天は我々の切ない願ひを遂に入れたのだ。勇躍して出發、雨後とは云へ蒸し暑い大氣が吹きつける。我々は彌生橋の上に立つた。おゝ見よ、はるか彼方に詩の國、傳説の國、熱帯樹木繁茂せる夢の様な青島が、横はつてゐるではないか。東の方果しも知れぬ太平洋より襲つて來る大波小波に混つて、鹽分を含んだ海風が、どつと吹き付けて、重心が傾く。我々はよろめく足を踏みしめて、憧憬れの青島に一步足を踏み入れた時、感激と亢奮とが渦を巻いて急轉下した。砂濱には、波の浸蝕より成る岩層が、累々として推積し、造物主の巧妙に、驚嘆の眼を見はり、左方には鬱々として、恰も南洋の其れの如く、檳榔樹の密林が聳え潮風を受けて搖ぎ、夢の様な傳説と神秘とを語らんとしてゐる。久しく渴望してゐた南國青島の地に、今現實に一步足を踏み入れたのだ。我々は、最早すべてを忘れ、感激と厚奮の

二重曲に浸り、總べてを開放し、思ふ存分青島の空氣を吸ひ込んだ。建國神秘の傳説に名高き潮の香高い青島神社に參拜

バナナの青い房が密林中より、ちら／＼と見える。私は、せめて海岸に寝そべつて、思ふ存分、南國情緒と、觀喜とに浸りたかつた。而し、時間は餘りにも切迫して、一瞬の逡巡をさへ、許されなかつた。

我々は、限りなき名残を惜しんで、そこを去らねばならなかつた。土産品一つも、買はず、息せき切つて、列車に、飛び込むや否や、發車、時に午後六時二十五分。再び、大淀に歸り、驛前の太田旅館に落着く。實に、さつぱりとした旅館だ。先程の豪雨で、ずぶ濡れになつた洋服、巻ゲートル等を庭で盛んに乾かされてゐる。下のシャツまで浸みこんでゐて早速着かへる。夕食の旨いこと／＼、明日の別府地獄巡りは自動車ですることになつて、一人前七拾錢宛發する。

夜の淀は安息の町だ、數軒の家より洩れる電燈の火は限りなき情趣と、清涼の氣をそゝる。柔かな蒲團の中に、入つて、今日の物足りなかつた青島の時と、烈しい風雨と、明日行くべき旅行のコースにしばし想像をたくましくしてゐた。我々の沈黙した後は、物音一つ聞えない、そこ、こゝで、微かな寢息が流れて來た。目が冴え切つて中々寝られぬ……間新らしい天井に映る微かな電燈の影を、見詰めながら……

五月十六日

丹 田 慶 三

午前七時廿五分大淀發の列車で、宮崎を経て温泉町別府に向つた。今日汽車で通り過ぎて行く所は、美々津(宮崎縣の中央で太平洋岸、美々津川の流域にある)を中心として、南方は隆起しつゝあり、北方は沈降しつゝある地形だと言ふことは、前以て聞かされてゐたが、扱て其處へ行つて見ると、何もそんなに思はれない。勿論車中から見ての話ではあるが………。唯、美々津を越えてから大分に至るまでの海岸が出入の多いことは我々にも分つた。リヤス式海岸は土地の沈降を表すといふことは、かねてから地理の時間に教へられてゐるから、こゝは沈降してゐるんだなと思つた。

一般に九州の鐵道はトンネルが多いが、中でも、この美々津から大分に至る間と、鹿兒島宮崎間とは特に多い、あまり長くないトンネルだが、數が多く拾を以て數へる位である。這入つたと思へば直ぐに出で、出たかと思へば又這入る。これでは我々の渴望してゐる海を見る暇が殆んどない。汽車の旅にも大分倦怠を感じた。

右手に佐賀關を眺めつゝ、大分を経て別府に着いた。直ちに驛前より自動車に分乗して、地獄廻りをした。我々七名を乗せた自動車は、一散に街を抜けて郊外に出る。段々高みへ

「又來て下さいね。」

「あなたも一度遊びに來て下さい。」

等の會話を交はしながら見送人と乗客とは、互に別れを惜しんでゐる。が見送人を持たない我々は、唯、湯の町別府に對して別れを告げた。

湯の町別府よ、さやうなら!

九州の山々よ、いざさらば!

テーブルは切れた。乗客の手に残つたテーブルの切れ端が、ひら／＼とひらめきながら手摺に巻き付いた。見送りの人々が蟻のやうになり終に見えなくなつた。夕靄はあたりをこめて別府の灯を消さうとしてゐる。瀬戸内海の島々も、其の姿を夜の帳の向ふに消してしまつた。

暗くなつて行く海を眺めながら、甲板では歌を歌つてゐる者もあれば、輪投げに一生懸命になつて居る者もある。船室では楽しかつた九州の旅のことを語りあつて餘念のない者やトランプ其の他の勝負事に夢中になつてゐる者もあり中々騒々しい。

夕食後は横になつたが周囲が騒がしいので、中々寝付かれない。やがて波の舷側に當る音を子守の唄と聞き流して、何時の間にか夢路を辿つてゐた。翌朝になつてから聞いた事だ

登つて行つて、市街や海を眺めながら先づ鶴見地獄へ。こゝは第一、第二の二つに分れてゐる。濛々と湯氣を吹き出してゐる所などは正に現世に於ける地獄だ。就中、次の八幡地獄の真中に大きな鬼の像が太い鐵棒を突立てて、頑張つてゐる所などは、全く佛教に言ふ地獄と同じだ。

海地獄! これは地獄中の最大のもので、廣々と海の如く熱湯を湛へてゐる所は海地獄の名に背かない。竈地獄の入口を車窓から眺めながら、次は血の池地獄へ。こゝの湯は全く血のやうに眞赤である。話上手の土産品賣が、この眞赤な湯で染めたといふ説明を聞きながら、ハンカチーフを買つた。自動車で宿に行つて、始めて温泉に入つた。が別に變つたことはなかつた。普通の湯だ。温泉に入つてゐるんだといふ意識が人々の病氣を癒させるのだらう。

湯の町別府! 何處か懐かしみのある町だ。二三の友と街を見物する。湯の町に相應はしい土産品を賣る店を眺めながら、海岸へ出て見ると、今夜我々の乗る葦丸は其の美しい船体を夕日に輝かせて居た。この船で今夜一晚寝るんだと思ふと、何だか懐しく感じられる。

五時半宿を出て船に乗る。船と棧橋とに無數のテーブルが張られた。

が夕食後甲板では活動寫眞があり、又T中學生の色々の茶目振りも中々面白かつたさうだ。少し名残り惜しいやうな氣がした。

五月十七日

西 田 亮 三

急テンポのエンチンの響、馴れない船内の一夜も過ぎた。四時だ! 最早や瀬戸内海の上にはほがらかな曉の微光が訪れて居た。曉の瀬戸内海! 海上の一大公園と歌はれて居る瀬戸内海、何とも言はれない美しさだ。我等の船はすべるやうに遠く白い船跡を引いて居る。島が次々に春霞の中に消えて行く。神々しい日出を拜んだのは六時前だつた。もうすぐ高松だ。屋島が向ふに見える。

高松港! 非常に美しい港だ。向ふに鐵道連絡船が見えて居る。下船、汽車に乗り換へて琴平宮へ。汽車は鹽田の間を走つて居る。坂出附近だ。

やがて汽車は琴平に着いた。たゞちに琴平神社に参拜の途に上つた。道は石段で、非常に長い。道の兩側から土産物を賣る女達がやかましくしゃべり立てゝ居る。石段はどこまでも續いて居る、だん／＼苦しくなつて來る。息がきれさうな氣がする。一週間の旅の疲れが一度に出たやうだ。やつとの

事で神前に登りついたときは思はず、ほつとした。流石海員  
の尊ぶ琴平神社だ、繪馬堂は船の模型や繪でうづめられてゐ  
る。

中食後、一行は屋島へ行くべく電車の人となつた。久振に  
乗つたローマンズカーだ、非常に乗心地がよい。栗林公園で  
箱型の電車に乗換へ、間もなく屋島に着いた。屋島、平坦な  
臺地だが、山道を登らねばならなかつた。琴平神社の参拜で  
つかれて居た僕等にはこの上もないつらい事だ。ケーブルカ  
ーがあるのだ。だがその望も容易に達せられさうではない。  
結局、歩いて登ることになつた。痛む足をひきずりながら登  
つて行く苦しみ……。幾度も幾度も廻りくねつて、道  
は更に續いて居る。あゝ、ケーブルカー！僕の頭からは容易  
にはなれやうとしない。苦しい思ひをした後の樂は又格別だ  
やつと、頂上にたどりつき、談古嶺から源平古戰場を眺めた  
時の喜び、はるか眼下に續く鹽田、遠く朧にかすんで居る瀬  
戸内海、皆沈黙せる詩の世界だ。だが、その沈黙せる景色は  
偉大な力で僕等の胸にひし／＼とせまつて来るやうだ。あち  
らでは茶店の男が如何にも得意さうに源平の昔語りをして居  
る。自稱口顎博士ださうだ、巧妙にかはらけを投げて、一躍  
僕等の人氣者となつた。再び重い足をひきづつて、記憶を新に

ふ。ディゼルエンヂンの響き、二十世紀が生んだ怪物の叫び  
聲だ！何たる心強さだらう。

正午過神戸入港。流石の廣い港内も、内外の汽船で埋まっ  
て居る。海岸に列なすドック、遙か彼方より響いて来る、リ  
ベツチングの音、如何にも神戸らしい景觀だ。

大阪に着いたのは一時だつた。珍客エムデンが棧橋に横づ  
けになつて居た。バスにて圓タクの洪水を通りぬけ、大阪驛  
より汽車に乗ると、急に氣が弛んでぐつたりした。一週間前  
大阪驛を通過した時は一同元氣だが、今は皆眠むさうな顔ば  
かりだ。

彦根の町が見える！僕等は今一週間の愉快な旅を終へて歸  
つて來たのだ。楽しかつた夢を抱いて。

## 敦賀歩兵第十九聯隊宿泊日誌

第一日（九月十六日）

算

登

此の日は吾々の將來に於て最も思ひ出の深いものとなるで  
あらう、待ち望んでゐた日は遂に到來した。雨天だが吾々の  
元氣は天に沖せん許りだ。午前九時彦根驛出發、まるで遠征

し、源平合戦の狀を畫きながら下山の途についた。途中で疊  
石を拾ふ。

栗林公園についたのは三時頃だつた。自然の美と人工の美  
のよく調和されたこの公園こそは、實に林泉の美その物のや  
うだ。バツクの山も美しい。泉水に樂しさうに泳ぎ廻る鯉も  
僕等の旅情をなぐさめてくれるやうだ。

宿について、綿のやうな体を休めたのは四時過だつた。長  
い間、夢に見、待ち戀がれた旅行も、もう終りかと思へば、  
心細くなつた。夕食後、街へ出る。街はきれいだ。ネオンサ  
インがなつかしく輝いて居る。昨日まで九州の空氣にひたつ  
て居た僕等に、急にもう關西に來たのだと感じさせるほど、  
大阪の氣分が町に満ちて居た。シネマ、ジャズの響き、イル  
ミネシオン、相變らず宵の街は賑やかだ。

五月十八日

最後の朝、再び高松より綠丸の船上の人となつたのは、六  
時半頃だつた。スクリーユの泡を名残りに、僕等に乗せた船  
を東へ、東へ、進む。平坦な屋島を、小豆島を後に、朝の瀬  
戸内海を東へ。上甲板では相も變らず、打はしやぐ聲が起つ  
て居る。全く船の旅は愉快だ。操舵室及び機關室を見せて貰

の途に上る將士のやうだ。吾々の心は最早敦賀聯隊の上空を  
飛翔してゐる。此の日同時に宿泊する長商も乗込んでゐた。

十一時過ぎ敦賀驛着、下車後直に栗野行の汽車に投じた、  
臆がて栗野驛着隊伍を整へて堂々兵營に向つて前進、約半時  
間にして兵營着。昨年も宿泊したせいか周囲の總べてのもの  
が懐かしく感ぜられる。五學年は第五中隊及第七中隊に割當  
てられた。臆がて、狩野少佐殿より第五中隊營庭前に於て輕  
機關銃及鐵兜並に毒ガス豫防器及陸軍の火兵航空並に其の他  
費用の關係に就いて話され後兵營見學昨年見たので別に珍ら  
しい感じも起らぬ。やがて日は暮れた。夜は八時半まで談話  
に油がのつて中々盡きぬ八時半の消燈ラツパの音と共に人員  
點呼があり、臆がて吾々は第一日を堅苦しい袋の寢臺に入り  
安らかな夢路を辿つた。

第二日

藤村 三郎

重ぐるしい寢息の中に、不寐番のスリツパの音がこゝと  
と聞えてくる。かすかな光をたよりに、時計を見ると、五時  
二十分頃だ。昨日の疲れで体の節々が堅い、藁ぶとんにすれ  
ていたい。窓際の誰かどすうとカーテンを引いた。朝の冷氣

が、窓硝子にしみこむやうだ。所々、大きな露の玉をおいてゐる。齒の根が、ガツ／＼してくる。思はず毛布の中に身をひつこめた。突如、營庭に湧出した劉曉たるラツパの音。おゝ起床ラツパだ「それつ」と夢中にベットからとび出して上衣を手にもつた「起床」と高く叫ぶ聲が、がらんとした、屋内に響き渡る。目まぐるしい軍隊生活の幕は切つておとされたのだ。階上から馳せ下りる足音や、皆のうろたへる騒ぎで頭がぼうつとしてゐる、朝の點呼はすんだ。やつと人心地に歸つた。清らかな朝の氣が、胃の腑までしみこむ。朝飯だ。當番はどうした「上等兵の大聲におどろきながらもやつと腹のすいてゐることを意識した。しかし窓をとほして、朝日に輝やく營庭を見よ。湧然と湧起る銃劍の響に、誰しも、目を見はるだらう。そこは肉弾だ、肉塊の鬪争だ。

第二日目の豫定は中隊教練だ。朝食後直に武裝して、練兵場へ行く。場は一面ひさをかくす位の雑草に蔽はれ、南方より東方に走る廣大な山麓をめぐらし、東隅には、山骨隆々たる大山を控え、眞に戰場を想像せしめるのに絶好の地だ。初秋の強い光は濕氣を含んだ草に照りつけて、むつとする草の香を發散せしめる。直行線進だ。ざつ／＼。足下に靡く草は吾等が敵だ。

午前十時、教練を終つて、野原に休む。續いて將校が陸軍歩兵火力兵器の説明を聞いた。一同其の精巧さと、之を扱ふ兵士の熟練とに心を奪はれ、疲れをも忘れて聞入つた。蓋し陸に、斯くの如き武器と兵士とを有し、海に世界に誇る海軍をもち、之に加るに、意氣と力のあふるる吾日本魂をもつてせば、吾々の進む所、何者か抗する者あらんと深く確信する所があつた。

午後二時迄降雨。二時より直に武裝、一路練兵場に行く、飯盒炊爨だ。六時には一同夕食を終り夜間演習にうつる。場の東西の隅に疎開して陣取つた。夕暗の迫るにつれて、しつとりと戎衣は濕り「折り敷け」をしてゐる目には味方の歩哨線に立つ眞黒な影がうつるばかりだ。がさ／＼と草をわけて、目の前に黒い影が浮び出る。やがて指揮官とこそ／＼話し會ふ、又闇の中にすつと消へる「誰だ」「バーン」「二發續けざまに、耳をつんざく様な響だ。草中にうづくまつて猛牙を磨く吾等は、其度毎に胸をさはがす。歩哨の誰何する聲は、増々はげしい。

前進命令は下つた。銃を片手に、一路敵陣へ同時に猛烈な應撃の響が、吾等をむかへる。「突つこめ」「わあ」「」勝鬪の聲。

かくて戰鬪は終つた。銃を抱いて、勞をねぎらう、勇士の群は虫の音絶へた闇の中へうごめく。沈黙は再び場内を封じた。

### 第三日

#### 藤野 精一

我校年中行事の一、兵營宿泊も早や二泊を重ねて、謂はゆる軍隊氣質なるものが汗線からしみこんでゐる。

昨夜の雨あがり後の夜間演習に疲れて今日は皆ぐつすりとなりてゐる。東天漸く白んで窓の外がぼんやりとしてきた。彦中精神に富んだ我等は朝の點呼に一人でも遅れるのが不名譽であるから昨日の疲勞もおさへて要領よく五分前位には目を覺ましてゐる。誰か早いのが窓から營庭に喇叭手が來た事を知らした。我々は既に準備終りだ。忽、曉の空氣を振動さす劉曉たる喇叭の響、それも半ば聞き流して靴を取つて外へ——之は前日の動作だ。今日は朝から雨だ。室内點呼である——ベットの整頓を終へ元氣よく番號をとへ朝の點呼は終つた。次は食事だ!! 水、残飯、バケツ、茶、麥飯等々忽そつたこれから愉快な食事の時間です。今日は朝から雨だから、皆暢氣にやり出した。昨夜の夜間演習の話で斥候の手柄話が出

た皆功一級金鷄章ものだ。——戦死しない戦には勇敢だ。又飯盒炊爨の黒パン製造ナンセンスが出る。さては昨夜の不寢番に立つ者が次の交代者を起していさかひをしてベットから引き出し、又鼻をつまんで起した時の恰好等々傑作續々として發表され盡きる所を知らない。

雨はまだやまない。皆有難いもうかつたと近江商人式?の計算をしてゐる。——一体こんどの宿泊は半分雨であつた。九時になつて雨が止んだ。併し雲が飛んでゐると集合の命令が來たので直に集合、練兵場に向つた。

密集教練半時間許り。昨日の疲勞の故かさんさんの不出來だ。歩行に足が草の上へ出ないガサ／＼やつてゐる。

四五年對抗陣地戦だ。敵四年軍は四百米程彼方の塹壕により前に鐵條網をはつて防備嚴重だ。我五年軍は直ちに疎開隊形をとり前進「散れ」の號令一下鮮かに火線を構成前進した豆をいるやうな銃聲、勇往邁進の其前進——丁度今頃滿洲事變の勃發を見たのだ。——今や戦酣。敵前百五十許雨後の草原に跳び込むやうに伏し各箇に着けし劍。機熟して突撃の令一下するや忽ち起る鬪聲鬪聲に次ぐ突撃……戦終り。勇敢な五年生の攻撃、之に對する嚴重な四年軍の防禦、更に最後に突込んで來た大膽勇氣皆實に感歎せずには居られないもの